

道博協 ニュース

第54号

発行所 北海道博物館協会
札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

「道博協基本問題検討委員会報告書」など 21世紀をみざした協会の将来像がまとまる

第三回役員会報告

平成七年度の第三回役員会が、去る三月二十一日、札幌市雪印パーラーで開催されました。当日は、会長以下、十六名の役員、事務局員の参集のもとに、以下にあげる議題について小笠原立男副会長（釧路市博物館長）が議長となり、熱心な討議が、午後五時まで続けられました。

まず、第一号議案として第二回役員会以後の「経過報告」（本誌八頁）が事務局長から報告されました。第二号議案としては、「平成七年度の事業報告」が事務局から提示され種々意見が交されました。



続いて、第三号議案の「北海道博物館協会基本問題検討委員会報告について」では、同委員会の会長を勤められた佐藤一夫副会長から、北海道博物館協会基本問題検討委員

本報告の取り扱いについて意見が交されましたが、① 次年度の厚岸総会で、佐藤副会長が会員に対して報告する、② 厚岸総会で、会員の意見、要望を聞く機会をもつ、③ 当報告書の成果のうち、新年度事業より、生せるものは生かす。以上の三点を確認し、そのための役員会を五月末に開催することになりました。

第四号議案の「平成八年度事業計画および会計収支予算等は、従前（平成七年度まで）のかたちで審議し、詳細については、「検討委員会報告書」の内容を次回役員会でとり込むこととなりました。

第五号議案の「第35回北海道博物館大会（平成八年度、厚岸町）について」では、開催地厚岸町教育委員会との接衝の状況や会場、大会テーマなどが、大会開催要領（案）にそって審議されました。この案をもとに、再度、厚岸町教育委員会と協議し、具体案を、次役員会に提出することになりました。

第六号議案の「その他」では、菅原繁昭理事（市立函館博物館長）から、平成八年度北海道博物館協会表彰者の候補者として、平成七年五月一日に死去された元市立函館博物館館長の石川政治氏（昭和二三年〜五二年まで同館在職）を推薦したい旨の提案がありました。種々、検討の結果、「北海道博物館協会表彰規定」第二条一項と「同規定細則」第五条を適用して表彰することとなりました。なお、この件とは別に、従来通り、平成八年度協会表彰候補者の申請を新年度早々に受け付ける予定です。

以上、三時間余りのあいだ小笠原副会長の司会のもと各役員熱心な討議により、六項目にわたる議題が審議されました。

最後に、城戸崎会長から、道博協基本問題検討委員会の諸氏に対して、深甚なる謝意が寄せられ、それを結びの言葉として、平成七年度最後の役員会が無事、終了いたしました。

（事務局長 野村 崇）

網走管内博物館連絡協議会の活動状況

網走管内博物館連絡協議会

会長 本間 義 勝

当協議会が役立されたのは昭和六十二年であり、その当時の網走管内には博物館、郷土資料館(室)各記念館などの施設が二十六市町村内に三十二施設あり、道内他管内に比べても多い地域であったようです。

これらの施設の連携を深めるために当協議会が設立されたわけですが、支庁管内全域をエリア(管轄地域)とした

この種の組織は、道内で初めてであり全道的にも注目を集めたようです(当時の新聞報道による)

その後においても博物館施設の開設が相次ぎ主な館を掲げても道立北方民族博物館、道立オホーツク流永科学センターさらに、ところ遺跡の館などが開設されております。

又、最近の情報によりますと上湧町「郷土資料館(仮称)」、生田原町「木のおもちゃ博物館(仮称)」、丸瀬布町「混虫生態館」さらに紋別市の新博物館構想を作成などそれぞれ来年度、再来年度オープン又は建設準備に取りかかっているところでもあります。

当協議会地域は、年々、増々博物館建設が進むものと推察されます。

この様な地域の状況にある中で、当協議会の活動内容も徐々に活発となってまいっています(平成七年度の活動状況)

(平成七年度の活動状況)

それでは、前置きはこの程度にいたしまして当協議会の活動状況を紹介させていただきます。

当協議会の事業の二本柱として研修会の開催(年二回)と広報活動の充実(年二回発行)でございます。

先づ、研修会の開催でございますが、職員研修要綱を定めますが職員研修要綱を定め、網走管内の博物館等の職員の資質向上とオホーツク圏の特性を生かした活動を推進するために博物館相互の連携を深めることを目的として実施しております。

- 一、個別研修会(前期研修会)
 - ・期 日 平成七年六月十五日、十六日
 - ・会 場 斜里町立知床博物館
 - ・対象者 管内博物館職員、教育委員会(社教)職員、博物館関係団体の構成員など
 - ・内 容 一日目 斜里町知床博物館の運営について
- 二、総括研修会(後期研修会)
 - ・期 日 平成七年十月十九日
 - ・会 場 北網圏北見文化センター
 - ・対象者 前期研修会と同様
 - ・内 容 講演の演題 「遺跡出土の動物遺体について」

同館資料整理の

講師 国立歴史民俗博物館 館長)

館長)



実際について 同館の広報・広聴について

助教授 西本 豊弘
次に広報活動の充実でございますが、次の様な内容で年二回発行することにしております。

一、機関誌の名称 「とびだせ網博協」

(今までの博物館にありがちなかたいというイメージ、既成概念を超え飛び出すしたいという意図を込めて名称を付けた)

二、内 容 総会報告(事業計画、収支予算等) 研修会の報告、トビックス管内博物館の動き、事業案内、出版物の紹介など

紙面の関係もありますので活動状況を簡単に紹介させていただきますでしたが、当協議会も設立以来まもなく十年にならんとしているが、今後においても「今、博物館に求められているものは何にか」を絶えず問いかけながら、又、当協議会の置かれているオホーツク地域の地域特性を十分に加味した具現化された活動を展開する必要があると常日頃研さんを積んでまいりたいと考えているところでです。

(事務局・網走市立郷土博物館 館長)

道東三管内の学芸員等会議

標津町ポー川史跡自然公園

梶田 光明

「これからの博物館のあり方」をテーマとして、平成七年度の道東三管内博物館施設等連絡協議会、学芸員等会議が九月二十一日、二十二日に開催された。広い道東の各地から一四時間かけて開催場所の標津町農村集落改善センターに三十二名が集った。

会議は、㈱丹青社デザインセンターディレクターの宮田昭男氏から「最近の博物館事情ー展示手法を中心としてー」という講演をいただいた。宮田氏は、博物館のメッセージの伝達は資料とパネル空間が総合して達成されるもので、「モノで見せ、語りかける展示」は学芸員の頭脳と手腕にかかっていることを強調された。そして、博物館のあり方としてイズニの考え方を引き、そのテーマである

Happinessを受け取ってもらうため、Fun,Clean,Friendlyを提供する空間とサービスが用意されている。そして、イズニの反省として人間によるコミュニケーションが再認識され、来館者の視点で再検討されていることが紹介された。

そして来館者側から見た最近の博物館として、参加体験(実験、体験、シヨウ、仮想現実体験)と交流(来館者と



マに添って説明、図書、レプリカ等を一箱につめて貸出すミュージアムキットなどの紹介が印象に残った。

引き続き行なわれた研究協議では帯広百年記念館の池田享善を総合司会として、最近三管内で新設、あるいは建設が進められている自然系の博物館から、浜中町の露多市湿原センター、富澤日出夫氏、根室市の春国倍原生野鳥公園ネイチャーセンター、木村孝行氏、厚岸町の厚岸水鳥観察館、福田美樹夫氏、足寄町の足寄動物化石博物館(仮称)澤村寛氏の事例報告があった。四つの事例は、それぞれ商工観光課、農林課、企画課、教育委員会と所管が違うが、露多布湿原、風蓮湖、春国倍、厚岸湖、別寒辺牛湿原、足寄動物化石産出地といったフィールドを持つのが特徴である。私自身は、フィールドと人々の結びつきを博物館がどう援助するのかという視点で、施設建設の考え方やその活動について注目した。露多布自然センターのユニークな催しと

友の会運営のミュージアムショップ、コーヒーショップ、厚岸水鳥観察館の外来研究者のための仮眠施設、春国倍ネイチャーセンターのネイチャーセンターだよりなど参考となる事例が多かった。また、足寄動物化石博物館の動物化石に特徴を絞った博物館建設はますます開館が楽しみにな

った。

二日目は、施設見学の前に開催地の企画として希望を募った「根室海峡クジラウォッチング」を早朝に行なった。野付半島沖から羅臼沖をめぐるコースで普段見ることのできないカマイルカやミンククジラなど生の海の姿は関心を集めた。

サーモン科学館の施設見学では、小宮山学芸員のウィットに富んだ説明を受け、サケ科の魚について学んだ。一部の水槽では魚に餌を与える体験を楽しんだ。ポー川史跡自然公園では資料館、開拓の村、標津湿原、カリカリウス遺跡をゆっくりと見学して、今回の会議の一連の予定を終えた。



基調報告
「最近の博物館事情」
講師 宮田昭男氏 富田昭

道立近代美術館が開設された頃は、県立レベルを中心とした、いわゆる「美術館建設ブーム」といわれた時期であった。それが去った今日、市や町立の開設が目立つようになった。北海道でもこの五、六年の間に五館がオープンしたが、それにとともに、新しい動きが生まれている。

鹿追町の神田日勝記念館はオープン以来、予想をはるかに上回る観覧者実績をあげ、

これまでの然別湖直行という観光客の行動パターンにおおきな変化をもたらした。もちろん日勝の絵を観たい、という目的で訪れる人も多い。それに続いて開設された岩内町の木田金次郎美術館にも同様の傾向が続き、関係者のよろこびもひとしおである。

ひとつの美術館をつくる、ということが、町にとつていかに大きな事業であるかは、ここにあらためていうまでもなからそう。ここでいう「つくる」とは、建物だけではなく、その後、半永久的に続く美術館運営も含めての意味で

あり、それに要する予算は決して少ないものではない。

したがって「つくった」後の効果というものが、町民全体から求められるのは当然のことであり、それに対して美術館が出す答えは一言でいえば地域の活性化への寄与ということになる。そして町民にとってそのもつとも判りやすいのが経済効果といえまい。多くの人が訪れ、町は賑

あろう。

同じ岩内町の財団法人・荒井記念美術館は、木田金太郎美術館のオープン以来、相乗効果で観覧者数が増えている。これにはさらに先の楽しみがある。岩内、ニセコ、真狩の三町村による「ミュージアムロード」構想が具体化されつつあるからだ。ニセコの有島記念館、真狩の国松登ギヤラリーと先の二館を結ぶ道道岩

北海道の美術館・

地域活性化の新しい動き

鈴木正實

わい、そして土地にながしかの金が落ちる。過疎化の歯止めの一助ともなる。

これに反応した岩内町の飲食店やホテルなどは、彼らの宣伝も兼ねたミュージアムロード・マップを作成し、来町者に広く無料配布するようになった。現在、わが町にも美術館を、という動きが三か所

内洞爺線をミュージアムロードに指定し、「美術・文学鑑賞の旅」へといざなう趣向である。すでに連絡会が結成され、五月には独自のマップやポスター、パンフレットが発行される予定であり、さらに道路標識の設置や共通チケットの発行も検討されている。

研究協議会はこの三月一日、二日の両日に渡って開催された。研究協議のテーマは「美術館とマスコミ」であった。水上武夫氏（北海道新聞社取締役）に特別講話をしていただき、さらに三館の事例報告の後に協議が行われた。

水上氏はこのテーマをアメリカと日本との比較のうえで論じてくれた。実に興味深い内容であった。そのなかに、アメリカの美術館を例にとり、広報と宣伝は分けて考えるべきである、という話があった。広報は「手段をどうするか」であり、宣伝は「金を使



平成7年度道美学芸研総会・研究協議会

ってやること」というのである。

ふだん私たちは、広報宣伝をしたくとも予算がない、といういいかたをよくする。限界論である。ところが、どうもそうではないらしい。自分たちの仕事を広く知ってもらうような手段を考えればよいのではないか。しかし具体的にはどのように・・・。

博物館で問題とされていることの多くは、専門と一般、または専門と専門というようにそれぞれの対象間をどのようにむすびつけていけばよいのかという「橋渡しの問題」に集約できるのではないかと思えます。前者ではいかに博物館の情報を公開するか、後者ではいかに学芸員の専門分野以外の情報を交換していくか、という代表的な課題へと直結していきま

す。専門や一般という対象それぞれの間にはどうも深い溝があるようで、そのことによって情報のスムーズな交換が妨げられていると考えられます。そしてまさにその点で私たちが悩んでいるという事は、博物館の存在理由は「対象間の橋渡しをいかにしていくか」というところにあるのではないかと強く感じています。私たちの先人は、時代を超えた対象間の橋渡しについては画期的な方法つまり「資料・標本の保管」という方法を残してくれましたが、現在、課題とされている同時代における異分野間同

士の橋渡しにはあまり効果的な方法を残してはくれませんでした。

四年ほど前から、それらの橋渡し、または溝を浅くする試みとして、「利尻島調査研究事業」を当館では行っています。この活動は、基本的には研究助成制度であり、利尻島で調査研究を展開したいと考えている研究者にわずかではあります

が助成金と島内での協力を与えようというものです。

ただの助成と違うことは、採択された研究者は島内で普及活動をしなくてはならないことと当館年報に研究報告などを執筆しなくてはならないことが義務づけられていることです。ちなみに助成額は一テーマにつき十五万円という破格な安さですが、毎年、南は沖繩から北は札幌までと、様々な分野のテーマがそれでも約十本ほ

ど応募されてきます。

この事業の企画は、①自腹で来島して研究している人への援助協力、②第一線の研究者の生の活動や情報を直接地元に残すこと、③年報における研究報告のコンスタントな投稿の確保、④学芸員の専門分野以外の勉強の場などを想定してたてられた（結構よくばりな）ものでした。もと

自然史系学芸員の現場から⑧

博物館は架け橋となりうるか？

利尻島調査研究事業

利尻町立博物館学芸員 佐藤 雅彦

かれた方の多くは、自腹でも来ようとしている意気込みの方ばかりですから、その語り

の熱っぽさは言うまでもありません。また、様々な分野の方々が博物館を訪れるということは、それだけ館の広がりも増えてきます。標本の作り方や調査方法などを直接自分のフィールドで教えてもらえることは、本当に勉強になりま

す。また、複数の異分野同士と気軽に聞きたい館が果たしてどれくらいあるのでしょうか？（博物館は、まるでイソップ童話に出てくる変わり身をするコウモリのようにも見えます。私はそのコウモリにどっつつかずのいやな奴と

尻という話題で行われることもあり、まさに綱目状の情報交換がされ始めていると言えます。以上の企画がすべての館に適用できるとは思っていないし、もちろんこの企画もいくつかの問題を含んではいけません。それでもどこか大きな組織のネットワークに吸収されるのでなく、自ら作

り始めた草の根ネットとしては必要にして十分すぎるものを手に入れることができたいうに思っています。

はじめに申しましたように、博物館は資料や情報を媒介にして異質な対象同士をとりもつ架け橋であるところに存在意義がある、と最近強く感じています。あらゆる分野の専門家にもなりきれず、かとい

つて一般の立場にもなりうるわけでもない（この虫なに？と気軽に聞きたい館が果たしてどれくらいあるのでしょうか？）博物館は、まるでイソップ童話に出てくる変わり身をするコウモリのようにも見えます。私はそのコウモリにどっつつかずのいやな奴と

いうイメージばかり持っていました。本来は「英知の象徴」としてその話がつくられたということを最近やっと知りました。博物館が今後、専門分野と一般の深い溝を埋める英知の象徴となりうるよう願うばかりです。

戦後五十年に関する企画の調査

釧路市立博物館学芸員 戸田 恭 司

調査の概要

太平洋戦争が終結してから五十年経過した昨年、釧路市立博物館では企画展「空襲から五十年」を開催、多くの方々から来館された。同様に、戦争や戦後の歩みに関する企画が全国各地で開催されていることから、各博物館施設へ調査票を送付して集約する試みを行った。

対象としたのは、道東三管

調査の結果

内を中心とした道内施設、県立や主要都市の施設、戦争や平和に関する展示がメインの施設で、調査の段階で企画の実施が判明した施設も追加した。結果、八四館が企画を実施していたが、ほとんどが特別展・企画展で占められており、ほかに講演会・記念誌の編集・体験学習などが見られた。



このうち、特別展・企画展は七月・八月に集中し、戦時下における人々のくらしを扱う内容が大部分であった。展示に対する来館者のとらえ方は世代などにより違いが見られた。若い世代は戦争の怖さ・悲惨さを感じてはいるものの、実感には乏しいようである。三十

〜四十代は戦争というテーマにかなりの関心を持っており、展示に対してもシビアな見方をしている。展示の中に戦争そのものや戦争責任についての記述不足、加害者としての視点の欠如を指摘している多くが彼らである。また、六十代以上の方にとっては、戦争の悲惨さを口に出しながらもなつかしい資料の数々という受け止め方をされていた。

実施した施設側の感想として多かったのが準備不足という声であった。これは企画が「戦後五十年」の記念の色合いが濃く、開催することに意味を持たせることが先行したこと、扱うテーマがさまざまな面で複雑な要素を持っているため企画段階で時間的余裕が得られなかったこと、また他部局との共催という立場から調整が難しかったことなどが考えられようか。

今後の課題としては、いくつかあげられている。まず早急に取り組まねばならないものとして、関係資料の収集、それと平行して戦争体験者からの情報も収集し、記録化することがある。従来の収集活動が不十分で、かつ実物資料の収集が中心だったことの反省から、多くの施設でその必要性があげられている。次に、この収集した資料や情報をもとにどのように歴史認識を形成していくかである。地域・国内さらには戦争に関係した国々の人々と共有した歴史観や事実の上で、ともに議論できるような基盤を生み出す作業も必要となる。

そして、展示にどのように反映していくか。年々、人々の意識の高まりとともに、戦争責任や加害者の側面についての記述が増えはきている。しかし、展示への妨害等を懸念した中で展示を行っている実態もあり、戦争に対してさまざまな思想や意見を持った人々の存在を考慮しなければならぬ。また、若い世代を中心に戦争を伝える必要性から、展示に訴える工夫がより求められている。

展示以外の企画では、当時の食物を再現して試食したり、防空頭巾を製作したりする体験学習に人気があり、各施設とも百名をこえる参加者を見ている。また、講演会や展示図録の発行は展示の中では表現しきれなかった部分を補う役割も果たしたようである。

さて、道内ではどのような状況であったか。今回の調査では、十三の施設において各企画が実施されている。やはり、ほとんどの施設で特別展・企画展を開催しており、期間は最短で七日、最長では百日をこえる。内容は、当時の社会や生活に関する資料を中心に展示構成されており、当時の住宅内部を再現したものや、体験者の証言を展示に生かしたのも見られる。さらに、精米や穀物を白で実際に挽く体験のできる展示もあり、さまざまな試みがなされている。

ほかに、防空頭巾などの所蔵資料について座談会形式で参加者から話を伺う企画や、戦争に関する史跡をまわる探訪会も実施されている。これらはより地域に密着した企画であり、先ほど述べた情報の収集とともに後世へ伝える努力の現れと見るべきであろう。

今回の調査は、博物館施設において戦争をどのようにとらえているかを知る機会となったが、今後取り組まねばならない課題の大きさと多さに正直なところ、驚いている。

館・園紹介

『名寄市北国博物館』

地域の特色を館名に

公園の森に囲まれて

名寄市北国博物館は、寒冷、多雪な冬と寒暖差のある明瞭な四季をもつ北国・名寄の歴史と自然に学び、その知恵をより発展させてこれからの暮らしに継承する目的で設置されました。施設を拠点に人的交流と事業展開の中からマイナスイメージの強かった「北国」を楽しみ親しんで、新しい北国の生活文化を創造してゆくことをめざしています。

寄公園のミズナラ天然林と旧鉄道防風林の緑に囲まれた旧名寄本線の敷地内にあります。入館者は全国で唯一保存されている冬の鉄路を守ってきたSL排雪列車の屋外展示の横を通り、正面のシマフクロウのモニメントに迎えられます。

ドーム屋根のエントランスホールでは名寄の冬を代表する自然現象・サンピラーと地球の自転を証明するフーコーの振り子がシンボル展示で配されています。館は鉄筋コンクリ一部二階建て総面積は二〇九九㎡の規模です。一階は展示、管理、収蔵部門で、常設展示室の他企画展を行なうギャラリーホール、約九万点の資料を納める収蔵庫などがあります。二階は普及・研究部門で、ホールの吹き抜けに面して講堂と地域情報室が配

されています。

研究室と書庫に接する地域情報室は文献や協力団体が寄せる歴史と自然の情報が発信できるほか交流と情報発信の役割をもっています。

テーマをもった常設展示室

面積五七四㎡の展示室の特色をキーワードで表現すれば北国にこだわった「冬・雪・寒さ」で、四つのテーマ展示と二つのコーナー展示で構成されています。テーマ展示は前半が模型、ジオラマなどを中心とした立体的な展示で、後半オープンスペースでの実

物資料を中心とした展示です。「北国・名寄」では地球や地形模型を使った道北の寒冷・多雪の自然を紹介します。「北

の先史」では永河期とそれ以後の気候変動と動物や人間の係わりを探ります。続く「カミイの森」ではジオラマで復原された冬の森をめぐる動物たちを通してアイヌの人々の自然観を学びます。後半の「さむさ、ひと、くらし」では、冬を重ねる毎に開拓の歴史を刻んできた先人の知恵を学びます。住まいの移り変わり、暖をとる、寒さをふせぐ、雪のぞく、雪上をあるく、雪上をはこぶの各コーナーにわかれ、雪や寒さとの関わりを資料でたどります。「映像展示コーナー」では、細氷現象を中心とした四季の自然を三面マルチスクリーンで紹介しています。また「郷土コーナー」では天然記念物「鈴石、高師小僧」、アイヌの伝承者「北風磯吉」、大関「名寄岩」の関連資料を展示しています。展示総数は八〇〇点です。

地域の素材を生かして

まだオープン後わずかですが、冬期間に実施したカンジキ探鳥会や雪中キャンプなどの周辺環境を生かしての体験事業も四季を通じて行なう予定です。北国という地域の素材を見つめ直す事から出発し、市民との交流を積極的に積み重ねながら、少しずつでも北国の生活文化の発信を視野に館活動を展開してゆきたいと考えています。

（鈴木邦輝 名寄市北国博物館学芸員）



名寄市北国博物館案内

★開館時間 九時～五時

★休館日 月曜日・年末年始

始

★観覧料 小中学生以下無

料・高校生以上二〇〇円・

団体一〇〇円（十名以上）

特別展の開催時は別途料金

★交 通 JR名寄駅から

徒歩十分（約五〇〇m）・車

は札幌から高速道路、国道

四十号線で三時間三十分、

旭川空港から二時間。

★問い合わせ先 名寄市北国

博物館

〒〇九六 名寄市緑丘二二

二番地 TEL・FAX

〇一六五四―三一二五七五

「北海道博物館協会基本問題 検討委員会報告書」の概要

本誌第一回目の平成七年度
第三回役員会報告でも紹介し
ましたように、一年有余にわ
たり、七名の委員により検討
を続けてきました道博協の新
しい未来を切り開く「北海道
博物館協会基本問題検討委員
会報告書」が、三月二十一日、
札幌市雪印パーラーで開催さ
れた役員会の席上、道博協基
本問題検討委員会の佐藤一夫
委員長から、城戸崎彰会長に
手渡されました。同委員会は、
平成六年度の旭川大会におけ
る、新しい社会・時代に即応
した協会のあり方の提起を契
機として、平成七年度四月に、

基本問題検討委員会準備会が
設置され、同年七月の第三十
四回松前大会において正式に
発足したものです。
委員は次の七名です。
委員長 佐藤一夫（苫小牧
市博物館） 福井正繼（札幌
市山動物園） 河野敏昭（滝
川市美術自然史館） 土屋周
三（小樽市交通記念館準備室）
黒崎康雄（浦河町立郷土博
物館協議会） 東谷清次（北
海学園大学）

同委員会は、平成六年度に
準備会として三回、平成七年
度に四回の検討会を札幌市で
もち、検討内容を以下のよう
に六章二十項目にまとめまし
た。それに七項目にわたる資
料をつけたもので、内容は次
のとおりです。

目次

- 一、委員会設置の目的と経過
- 二、道博協の方向性（基本方針）

① 北海道の博物館のあゆみ

- ① 博物館の現状
- ② 今後の課題と展望
- 三、組織体制

① 博物館ネットワークの確立

② 団体別・研究部門別の組織

③ 役員体制

④ 事務局体制

四、事業計画

① 博物館大会と総会のあり方

② 研修事業の充実

③ 機関誌・報告書の編集

④ 表彰基準と選考方法

⑤ 新規事業の取り組み

⑥ 予算構成

五、その他

① 北海道教育委員会との連携

② 国・道・市町村への要請

③ 学芸員養成大学との連携

④ 国際交流活動の推進

⑤ 地方行革と博物館

- ① 北海道博物館協会 員名簿
- ② 北海道博物館協会 資料五
- ③ 北海道博物館協会 資料六
- ④ 北海道博物館協会 資料七
- ⑤ 北海道博物館協会 章程規定
- ⑥ 北海道博物館協会 章程規定細則

本報告書に盛られた提言は、道博協の将来にとっても、どれも重要なものです。しかし、予算の裏づけの必要もあり、三月二十一日の役員会では、平成八年度事業計画にできる限り、提言を生かすというこ

とで、五月三十日に第一回役員会を開く予定です。

また、会員の皆様からも御意見を聞く機会を、七月四日に開催される第三十五回道博協厚岸大会のなかで日程をとるよう調整中です。そのため、事前に本報告書をお手元に届けるよう準備を進めておりますので、建設的なご意見を寄せられますようお願い申し上げます。

（事務局長 野村 崇）

資料一 北海道博物館協会加盟団体の地域別・種別一覧表

資料二 主要都府県の博物館協会の活動状況

資料三 北海道の登録博物館・相当施設

資料四 北海道博物館協会

資料五 北海道博物館協会

資料六 北海道博物館協会

資料七 北海道博物館協会表

章程規定

章程規定細則

北海道博物館協会表

関係団体連絡会議
（於：かでの2・7、
城戸崎会長、野村事
務局長出席）

「道博協ニュース」
第53号刊行

「第34回北海道博物
館大会報告書」印刷
完了、上記「道博協
ニュース」とともに
送付

徳川日本博物館協会
会長逝去に伴い弔
電・供花

名寄市北国博物館開
館式に会長より祝電
を打電

道博協道南ブロック
博物館施設等連絡協
議会（於：江差郷土
資料館）

第4回道博協基本問
題検討委員会（於：
札幌市職員会館）

第4回道博協美
術館学芸員研究協議
会（於：北海道近代
美術館）

学芸員部会役
員会（於：小樽市交
通記念館）

第3回役員会（於：
雪印パーラー）

3・7

3・11

3・21

3・7

3・15

事務局日誌

（平成7年12月1日～平成8年3月31日）

12・15 平成7年度社会教育